

短報

第5回国際マレーシア研究会議

山本博之(京都大学)

2006年8月8日から3日間にわたり、マレーシアのプトラ大学(UPM)で第5回国際マレーシア研究会議(MSC)が開催された。MSCはマレーシア社会科学学会(PSSM)の主催で1997年よりほぼ隔年で開催されており、今回が第5回にあたる。

3日間の会議では、3つの基調講演、3つの特別セッション、そして58の一般セッションが行われた。一般セッションでは6~7のセッションが同時に進行し、200近くの報告が行われた。マレーシア国内からは、報告数の多い順に、国民大学、プトラ大学、理科大学、マラヤ大学などから報告があり、国外からは日本を含む8つの国から19の報告があった。これらの一般セッションのうち「マレーシア・日本関係」は東南アジア学会がPSSMに協力する形で組まれたものであり、原不二夫氏と吉村真子氏が報告を行った。このほか、東南アジア学会の会員では舩谷鋭氏、井口由布氏、そして筆者が個別に報告を行った。

今回のMSCでは「社会科学は社会においていかなる役割を果たしうるか」が強調されていた。振り返れば、マハティール政権末期の1999年、次期首相と目されていたアヌアール・イブラヒムが失脚した直後に開催されたMSCでは、ほとんどのセッションが調査研究を通じた政府批判という性格を帯びており、来る総選挙で政権を奪取するぞと言わんばかりの「決起前夜」の雰囲気醸し出していた。今回のMSCでは国内参加者の多くは政権批判よりむしろ政策立案に関心を寄せている様子で、その意味でかつてのMSCのような緊張感はほとんど感じられなかった。ちょうど今回のMSCの報告の中に、指導力が未知数とされたアブドゥッラー政権の安定の背景に関して、同政権がマハティール政権時代に在野に置かれていた諸勢力を大量に政権に取り込んだことを指摘するものがあり、今回のMSCの雰囲気と重ね合わせてとても興味深く感じられた。

報告内容は多岐にわたっていた。科学技術・教育研究、経済発展、政治体制など開発と成長

に関するものや、民族・ナショナリズム、イスラム教・宗教、平和構築・NGO など社会の統合原理に関するもののように、これまでのMSCでもよく見られたものだけでなく、女性・ジェンダー、老い、保健衛生、先住民などに関する報告も多く見られた。これらのうち3つ目のカテゴリーでは、調査対象に属する人々が報告者となる例も多く見られた。マレーシア社会の主流派が調査研究を通じて社会的弱者に救いの手を差し伸べようとする側面と、その研究対象が報告者となって「自分たちも国家の一員である」と主張する側面を併せ持つものとなっていた。

近年のマレーシア研究で注目されているものに映画がある。今回のMSCでも、一般セッションでの議論に加え、『細い目』のヤスミン・アフマド監督らを招いてマレーシア映画の現在を論じる特別セッションが企画された。この映画を「華人少年とマレー人少女の民族を超えた恋愛」と言うのは間違いではないが、それを「マレーシアの多民族社会の生活をリアルに描いている」と評したのでは逆さまになる。ガールフレンドの機嫌を損ねないよう気を遣う少年や、市場で買い物するよう主人に頼むお手伝いさんなど、マレーシア社会で一般に見られる人間関係の「逆転」が数多く忍び込ませてある。「存在しないマレーシア社会」が美しく描かれているからこそ、人々はこの映画に惹かれるのではないだろうか。

このほかにも、都会のリッチなマレー人家庭の少女が失恋を契機にフットサルに挑戦する物語を明るく楽しく描きながら現代マレーシアの家族の問題を織り込んだ『ゴールと口紅』など、社会問題を扱いながらも売れ行きもよいマレーシア映画はいくつかある。また、サバ州では2002年に発表された『オラン・キタ』が爆発的な人気を博して以来、サバを主要なマーケットとしたオリジナルビデオが数多く制作されている。これまで社会的弱者として救済の対象とされてきた人々が映画を通じて自己表現を始めたと言ったら言い過ぎだろうか。経済発展優先のマハティール時代が終わり、「もう1つのマレーシア」に積極的に目を向ける動きが登場する中、かつて社会的弱者とされた人々を社会にどう位置づけるのかが今後のマレーシア研究における主要な課題の1つとなることだろう。の手を差し伸べようとする側面と、その研究対

象が報告者となって「自分たちも国家の一員である」と主張する側面を併せ持つものとなっていた。

近年のマレーシア研究で注目されているものに映画がある。今回のMSCでも、一般セッションでの議論に加え、『細い目』のヤスミン・アフマド監督らを招いてマレーシア映画の現在を論じる特別セッションが企画された。この映画を「華人少年とマレー人少女の民族を超えた恋愛」と言うのは間違いではないが、それを「マレーシアの多民族社会の生活をリアルに描いている」と評したのでは逆さまになる。ガールフレンドの機嫌を損ねないよう気を遣う少年や、市場で買い物するよう主人に頼むお手伝いさんなど、マレーシア社会で一般に見られる人間関係の「逆転」が数多く忍び込ませてある。「存在しないマレーシア社会」が美しく描かれているからこそ、人々はこの映画に惹かれるのではないだろうか。

このほかにも、都会のリッチなマレー人家庭の少女が失恋を契機にフットサルに挑戦する物語を明るく楽しく描きながら現代マレーシアの家族の問題を織り込んだ『ゴールと口紅』など、社会問題を扱いながらも売れ行きもよいマレーシア映画はいくつかある。また、サバ州では2002年に発表された『オラン・キタ』が爆発的な人気を博して以来、サバを主要なマーケットとしたオリジナルビデオが数多く制作されている。これまで社会的弱者として救済の対象とされてきた人々が映画を通じて自己表現を始めたと言ったら言い過ぎだろうか。経済発展優先のマハティール時代が終わり、「もう1つのマレーシア」に積極的に目を向ける動きが登場する中、かつて社会的弱者とされた人々を社会にどう位置づけるのかが今後のマレーシア研究における主要な課題の1つとなることだろう。